

いしづち

2014.7

No.099



公益社団法人 愛媛県建築士会

<http://www.ehime-shikai.com>



人 建築家、松村正恒を見てきた人
“切れ”のある郷愁風景
愛媛の職人「大工」

1	会長挨拶		新 会 長 寺尾 保仁 ……① 前 会 長 本田 壽 ……②
2	間	聖と俗との間	……③
3	人	建築家・松村正恒を見て来た人・二宮初子	……④
4	夢・現	夢・ウン考 現・大工の技の見せ場、今昔	……⑩ 松 山 支 部 永井 明高 ……⑪
5	“切れ”のある郷愁風景	いしづち表紙、山田きよ氏の版画について	松 山 支 部 玉乃井公和 ……⑫
6	伝える	愛媛の職人「大工」	兵藤 泰邦 ……⑬
7	理事会・総会報告	平成 26 年度 第 1 回理事会（概要報告） 平成 26 年度 公益社団法人愛媛県建築士会 通常総会報告	……⑭ ……⑰
8	委員会・支部報告	教育・事業委員会活動について 委員会報告 建築市民講座 松山支部 総会報告	教育・事業委員 尾藤 淳一 ……⑲ 文化財・まちづくり委員 白石 耕平 ……⑳ 支 部 長 赤根 良忠 ……㉑
9	けんちくの輪	ひとりごと（雑論） 建築士会とわたし	周 桑 支 部 木村 久司 ……㉒ 八 幡 浜 支 部 氏間 貴則 ……㉓
10	お知らせ	編集後記	情報・広報委員 ……㉔

※尚、表紙及び本誌記事の無断転載を禁じます。



版画

題：臥龍山荘
版画：山田 きよ
内子町在住

表紙の写真について

京都のお寺でも竹垣に擬竹が使われてきた。理由はどうあれ「まがい物」は本物ではない。大洲脇川の景勝地に佇む臥龍山荘は、建立こそ明治期だが、今でも日本古来の書院造りと数寄屋建築の技法を伝えている。地形を生かし、坂道に沿って続く土塀の内側は、本物の和の心が息吹いている。

表紙作者 山田 きよ プロフィール

1959 喜多郡五十崎町（現内子町）に生まれる
1980 松山デザイン専門学校卒業
1982 広告デザイン会社を退社し、家業の竹材業に就く
1988 独学で切りぬき手法のシルクスクリーン版画を初制作
以後、内子町内子座や大風合戦のポスターを手がける
1993 初の個展
2003 愛媛県文化協会奨励賞
2012 個展回数が 100 回となる

（本名 山田 清昭 内子町在住）

会長就任挨拶



新会長 寺尾 保仁

この度 会長に就任致しました四国中央支部の寺尾保仁です。どうかよろしくお願い致します。愛媛県建築士会は 社団法人として発足より62年、公益社団法人に移行して2年目となります。私は今年で61歳になります。昭和58年の入会より平成2年には青年委員会委員長として理事となりました。平成6年の松山での全国大会や連合会青年委員を経験した事は、本田前会長を初めとする諸先輩方と愛媛の仲間、中四国ブロック・全国大会で年に一度いい刺激を受ける士会の仲間の数に比例して、仕事の上ではもちろん人としても何のものにも代え難いものとなっていることを強く感じます。改めて31年の月日に感謝です。

私はかねてから会長職には当然のことではありますが、全県どの地区からでも立候補出来るよう、体制も整えておくべきだと思っておりました。この度、諸先輩のお薦めもあり、実際私が立候補について考えた時、やはり距離的なハンデに伴う業務への影響を思わない訳にはいきませんでした。

しかし その不安を払拭したものは、長年携わってきた士会への思い、前会長の下で共に進めてきた公益法人改革の今後の運営への思いと、理事の皆様を初めとする会員の方々の温かいご理解、事務局の皆さんが万全のサポート体制の提供を約束してくれた事です。こうしてご推薦をいただきまして会長の大役を仰せつかることとなりました。

この後におきましては 長きにわたる諸先輩方の努力を無にすることなく、ますます会員相互に研鑽を積み、建築士会が社会的にも認められるような会になるように、役員の方々を初め会員の皆様と一つになって、一生懸命努力する所存です。

初年度の会の運営に当たり重点施策実行は元より、特に力を入れたい事項は

一つに 建築士会の一般の人への認知度を高めること。

私たちの行っている活動や、日頃講習や研修を行うことで 建築士としての資質の向上を図るために研鑽を積んでいることを広く一般の人にも知ってもらうための広報活動をする。

一つに 会員一人ひとりが建築士としての自覚を今以上に持つこと。

建築士の社会に対しての責任の重さを十分に理解して社会貢献をする。

一つに 公益法人の組織をもっと活かしたい。

公益法人についてもっと勉強して メリットを活かしたい。特に財政の健全化を図ること。

委員会活動においては、それぞれの委員会が責任を持ってふさわしい活動をすることによって、会の活性化を図ることを希望します。そうなれば、おのずと会員の増加も図れるのではないかと思います。

皆様にこれまで以上のご協力をお願い申しまして就任の挨拶といたします。

会長退任あいさつ



前会長 本田 壽

平成 26 年度通常総会が会員各位のご協力により盛大に開催されましたことに、心から感謝を致しております。

平成 22 年度通常総会にて、和田前会長さんのあとを受け、第 13 代会長に就任させていただきました、2 期 4 年間にわたりまして、会員の皆様、役員の皆様、事務局の大西局長さん、西岡さん、河野さんに支えられて、微力ながら公益社団法人愛媛県建築士会の発展につとめてまいりました。又、本会の運営には、県ご当局をはじめ、関係諸官庁並びに建築関連団体の皆様、そして建築士会連合会のご指導に感謝を申し上げます。

この 4 年間に振り返ってみますと、まず、「公益社団法人への移行」を始めとして、会員増強運動の推進、

建築士の資質の維持・向上の推進等、色々な取り組みがありました。これらの事は全て建築士会の基本です。

今後は、この基本をしっかりと捉えて建築士会がより発展する様に寺尾会長さんをもとに全会員と役員が一丸となって、まい進されますよう、ご祈念申し上げます。

私も、一会員として建築士会発展のため一生懸命努力をいたします。そして活動に参加をさせていただきたいと思います。

会長としての 4 年間をご支援いただきました会員の皆様、役員の皆様、事務局の皆様、そして関係各位に感謝を申し上げ退任のご挨拶と致します。ありがとうございました。

一人の百歩より
百人の一步を

聖と俗との間

2

間

はじめに

間合い.間が悪い.間口.間遠い.間に合う.間抜け.間延び等々。

試みに空間的.時間的な“あいだ”を表わしている“間の言葉”がどのくらいあるのかと、辞書で探してみたのですが、生来「間」の感覚を持って生まれている“間のいい”私達日本人の割には、「間」の言葉は、思いのほか少なかったような気がします。

それでも「間」は、私達の心身に染みついた感覚であることは、あまり異論のないところではないかと思えます。

「間」は例えば、西洋の白黒二元的.対立的な関係や感覚とは違って、言わば白と黒とのあいだにある、グラデーションを持ったグレーゾーンとして、白と黒とを無理なく自然につなぐ、調和的な感覚としてあるかと思えます。

この「間」は、空間的.時間的な「間」が、今もどこにでも残されている神社やお寺などの“俗なる世界”と“聖なる世界”とをつなぐ参道や、新旧を問わず建築物に設えられてある“公”と“私”とをつなぐアプローチ、或いは住まいの縁側、さらには川の兩岸をつなぐ橋や渡し場などの、言わば「境界領域」に焦点を当ててみて、そのゆるやかな「つなぎの空間」の有り様を見てみようというコーナーです。

言い換えればそれは、“もの”として表現された路上観的なものではなく、意識的に、或いは無意識の内にも設えられた、かたちのない「つなぎの空間」の

有り様を見つめてみよう、ということにもなるかと思えます。だとすればそこには、“自然の設え”による「つなぎの空間」も見つかるかも知れません。

そしてそれを見つめることの意味するところには、この「つなぎの空間」を見つめ、体感することで、私達が生来持っているであろう「間」の感覚を改めて思い出し、それをこれからつくられる建築に生かすことで、調和のとれた“間のいい”建築や街ができないものか、という思いも込めてあります。

(様々な場で、面白い「間」が設えられているところがあれば、写真.キャプションと共に広報委員会の方へお寄せください。)

間.聖と俗との間

履脱天満神社 参道 (松山市久保田町)

約200mの長さの参道の松並木が、これ程手入れが行き届いて残されているのは珍しいのではないかと思います。

“俗なる空間”から、一對の狛犬(獅子のような)の結界を“くぐる”だけで、同じ道で続いていながらも、意識の上では“俗”から“聖”へと至る「つなぎの空間」へ足を踏み入れることになる。そしてその参道の松並木に“囲まれた”「つなぎの空間」は、空間的感覚としても外気にさらされながらもまったくの外ではない、気分的にはあいまいなグレーゾーンとなって、「俗」と「聖」という対立する二元を、ゆるやかにつなぐ役割を果たしています。



建築家・松村正恒を見て来た人・二宮初子

「建築家」とは、一体何をもってして建築家と呼ぶのか。そのあたりの定義のようなものを考えることもなく、一般的に、或いは建築設計を生業としている人達であっても、その外観が一見カッコウのいい建物を設計する人を、何となく建築家と思い、呼んでいるのではないかと思います。

さらにはその上に、多くの建築家を自称する人々がいることを加えれば、「建築家」とは何となくどころではなく、その様相は、カオスの状態のようにも見えて来て、まさに「カーカー」とカラスの群れのごとく耳障りなものに聞こえて来ます。

その混沌とした「建築家」の世界を、一言でもって整理整頓できる言葉があるとすれば、それは「ヒューマニズム」ではないかと思います。建築設計をするその地盤に、この「ヒューマニズム」があるのかどうか、それが「建築家」とその他とを峻別するボーダーラインになるのではないかと私は独断的ながらも考えています。

不遜にもその“モノサシ”から「愛媛の建築家」を見つめてみれば、私の目には松村正恒先生しか浮かんで来ません。

今回の「人」は、その松村先生に長年師事された二宮初子氏に、「建築家・松村正恒を見て来た人」としてご登場頂きます。聞き手は、八束建築研究所の八束志郎氏と、私・玉乃井公和の二人です。

尚、それぞれのお名前の敬称は略させていただきます。
(於・玉乃井公和建築事務所・平成26年5月2日)

松村先生を知ったキッカケについて

玉乃井 | それでは早速お話をお伺いしたいと思います。二宮さんが松村先生をお知りになったキッカケはどういったものだったのですか。

二宮 | フランス語の辞書でした。所長（松村氏）は卒業後、恩師の薦めで土浦亀城事務所へ入所され、その傍ら国会図書館通いを初め、アテネフランセでの学びもその内の一つだったとか。

私がフランス語をかじりかけていたことを所長が伝え聞き、辞書のことや、さらにはあ

る手紙の訳を頼まれたという訳です。

それで何とかその責任は果たせたのですが、その返礼だったのか、所長からフランスの現代建築.1958年9月号を頂きました。「ミース・ファンデル・ローエ」の特集で、もちろんフランス語です。

所長は英語が堪能だったので、その雑誌を読まれたのは、たぶん終わりの方に掲載されていた英文の方を読まれたのかも知れません。

余談になりますが、後年ライトツアーに参加した際に、シカゴでイリノイ工科大学のクラウンホールや、ミシガン湖畔のレイクシヨア・ドライブ・アパート（ミース設計）を見ることができたのは喜びでしたね。

玉乃井 | そうだったんですか。

二宮 | 八幡浜市役所では所長は変人だとは聞いていましたが...

組合の大会だったか、会の最中に賛成も何も聞かれもしないのに、突然「賛成!!」って手を挙げて、それはもう変わった人だなと思いました。それが皆の笑いを誘いました。たぶんその大会が、退屈な内容だったのでしょうね。

それで、「松村さんは一杯飲んで来ているんじゃないか」、とささやく人がいました。所長はそう言う変わり種でした。

八束 | そんな雰囲気があったんですか。

玉乃井 | 八幡浜市役所時代に二宮さんは、松村先生のお仕事についてはご存じだったのですか。

二宮 | 殆んど知りませんでした。当時私は、社会教育課におりましたので。役所のそばに新しい図書館が所長の設計で出来ました。なかなか良いものでしたよ。小ぢんまりとした、しかしユニークな建物で。

私は図書選定委員会（有識者や市議員による）の係をしており、会の開催毎に図書館の一室を利用していました。

玉乃井 | その当時の地域の人達が、松村先生につくられた建築に対して、何か関心を持っていた様子はありましたか。

二宮 | その頃はまだそれ程関心はなかったようです。

関心が持たれるようになったのは、やはり日土小学校が文芸春秋の建築十傑に入った頃からじゃないかと思います。

玉乃井 | その建築十傑は、地域の人にも知られる訳ですか。

二宮 | 今の日土小学校のように知られなかったと思います。地域の人にまでは。

そして松山へ

玉乃井 | それで松村先生が八幡浜市役所をやめられて松山へ事務所を開設される時に、二宮さんも松村正恒建築設計事務所へ入られる訳ですか。

二宮 | そうです。押しかけみたいなのでした。迷惑がられましたけど…。

玉乃井 | 事務所の場所は、最初はどこにあったのですか。

二宮 | 一番町の伊予鉄会館です。そこに三十年くらいいたんじゃないかと思います。

玉乃井 | その後正和商事の所になる訳ですか。

二宮 | そうです。私はあの場所には長くはいませんでした。三越へ転職しましたから。

玉乃井 | 松村先生が松山へ出て来られるキッカケは何だったのでしょうか。

二宮 | それは十傑に選ばれた後ですからね。役所での仕事の限界を感じておられたのかも知れませんね。私の推測ですけども。

八束 | 日土小学校ができたその評価で十傑に選ばれたのですか。

二宮 | それだけではないと思います。それまでにずっと江戸岡や神山など、一連の学校建築がありましたからね。

玉乃井 | それで松村先生も松山へ出て来られるのに、何のあてもなく出て来られるということはないと思うのですが、そのあたりのところはどうかだったのでしょうか。何か人とのつながりなどは。

二宮 | それはあったのでしょうか。病院建築が多かったのは、当時県医師会会長をされていた方が大洲の出身で、先輩後輩の間柄でしたから、そういったところから設計の依頼があったの

じゃないかと思います。

玉乃井 | それで病院建築が多かったのですか。

二宮 | そうです、次々と。それとあと住宅は知っている人から順次広がってって、200軒くらいは設計しましたけどね。

八束 | 200軒!すごい数ですね。

二宮 | 初めの頃は所長がササッとね。今の皆さんが書かれるような詳細図まではありませんが。大きな住宅や鉄筋コンクリートの住宅などは、所長が全部一人で図面を描きましたから。

玉乃井 | 図面は殆んど。

二宮 | 初めの頃は全部一人ですよ。

事務所内で書く松村語録

玉乃井 | 松村正恒建築設計事務所には、松村先生・二宮さんと他には？

二宮 | 八木さんという方がおられました。数年前に亡くなられましたけど。

玉乃井 | それから、事務所の中で松村先生が、建築について話されるようなシーンはあったのですか。

二宮 | 話されるのは時々。あの、松村語録を今日資料として持って来ていますけど。事務所でも面白い人でしたね。何と言うのかユーモアのある人でした。

八束 | そうそう。松村先生にはそういう印象があるんです。

二宮 | もうそこら辺にある紙に書いたものがこれですよ。(写真) もう捨てたものもありますけどね。まともな紙には書かれないんですよ。これ。

八束 | これ松村先生の直筆ですか。

二宮 | そう。だから捨ててはいけないと思って。

これなんか私が一級建築士に合格した時の、ダイヤルミにおられた土居さんから私への伝言なんですが、所長が自分で脚色をして書いてあるんです。

二宮 | 所長は事務所では初めはブスツとした感じでしたから、私の友達が来て、そおっと入って来て、所長がいない時には中へ入る感じでした。所長は誰に対しても、分け隔てのない

対し方をされますから、友人達もいつの間にか所長と友達になるくらいで、面白いことばかり言われていました。

玉乃井 | そうすると、そういったかたちと言うか、雰囲気色々なことを語られるということですか。

二宮 | そうですね。私も所長からは叱られることもよくありましたが、口は悪くても心からの叱責ではありませんからね。でも当初は私も便所へ走ってはよく泣いたものでした。

玉乃井 | 二宮さんご自身は建築関係の学校へは行かれたのですか。

二宮 | いいえ。旧制最後の女学校卒です。経済的理由で進学を断念し、兄の友人の紹介で、近くの小学校へ代用教員として一年間勤務したりして。

その年の夏に父が亡くなり、翌年母が病に倒れて、家事を守ることになり、二年後に受験制度が採用された八幡浜市役所へ合格し、勤務ということになったのです。

教育委員会時代に、日本女子大学の通信生（家政学部・生活芸術科）として、住居学を学ぶことができました。

その間、市役所から1回、後3回は松村事務所から、40日間のスクーリングに行かせてもらいました。

レポートの提出と後の試験。仕事と勉強の両立は大変でしたが、学ぶ楽しさで、遅い青春を駆け抜けました。昭和40年に卒業。

その年に二級建築士を取得したものの、その後の一級建築士までの道程は長く、家庭的にも苦難が続きましたが、何とか乗り切ることができました。

所長や事務所に協力して頂いたことは、感謝の他ありません。そのご恩返しができないままですが…。

鉛筆を走らせる音が聞こえる

玉乃井 | プランや設計図の殆んどは松村先生が描かれたということですが、私はもう随分前に新谷

小学校の図面を見たことがあるんですけど。

二宮 | 鉄筋コンクリートのですか。

玉乃井 | はい。

二宮 | あれは年代としては遅かったですね。

玉乃井 | もう図面が見にくくてね。

二宮 | いえね。役所時代の所長の図面はきれいなんです。昔はトレペではなくて、和紙で描く時代があったでしょ。全紙の大きい。それを見せてもらった時、所長もこんなにきれいに描いていた時代があったのかな、と思いましたよ。

玉乃井 | 結局速く描かなければならない、ということから。

二宮 | だから私の知人が入って来て、ドアを開けたら「シャー、シャー」という音がするって言うんです。何の音かと思ったら、先生が鉛筆を走らせる、図面を描かれる音だった。いつもそばにいる者には分からないでしょ。そんなこと。でも外から入って来た人にはね。聞こえるみたいでした。

玉乃井 | エネルギーを感じますね。

二宮 | すごいスピードですから。

建築十傑の時

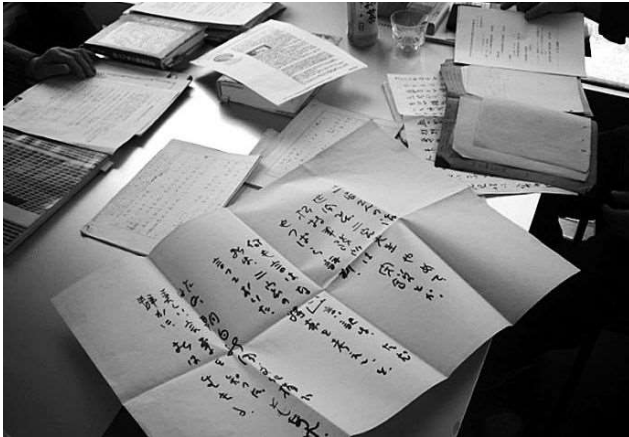
玉乃井 | 松村先生ご自身の人間性を知る上で、私が個人的に興味があるのが、文春の建築十傑に入られた時のことで、その時の先生の感じはどうでしたか。その時はまだ八幡浜市役所におられたのですか。

二宮 | はい。所長は十傑に選ばれても驕るような心はなくて、「その名声をうまく使えば」、と言うような人もあったようです。でもそのようなことは嫌だったんでしょう。絶対にそういうことはしない人でしたね。

八束 | ああ、やはり思っていた通りの人でした。

二宮 | そして皆さんもそうでしょうけど、自分の所へ仕事をさせてくれと、請負さんから何か持って来られても、絶対に受け取られなかったようです。それはもう清廉潔白な人でしたよ。

お中元やお歳暮は頂いてましたけど。



(松村語録)

ヒューマニズム・子供たちへの目線

- 玉乃井 | 松村先生の何かの著書に書かれてあったと思うのですが、松村先生は保育所の研究をされていたとか。
- 二 宮 | そうそう、託児所のね。国際建築という雑誌があったでしょ。その頃からずっと研究をされていたみたいですよ。外国のものでしょ。だから翻訳をしたりされたのではないかと思います。所長は蔵田周忠先生が出されたグロピウスの「生活空間の創造」の翻訳を手伝っておられます。
- 玉乃井 | そういった子供たちへの視点の地盤があって、日土小学校へつながる訳ですね。
- 二 宮 | 話があちこち飛んで申し訳ないけれど、所長は絵がとにかくうまかったんですよ。だから絵描きになりたかったと、どこかに書いてあったように思いましたが。中学生くらいの頃にね。
- 玉乃井 | 松村先生の建築は、やはり「ヒューマニズム」というものが根底にあって出来ているように思うのですが。
- 二 宮 | 根底にあるんですね。
- 玉乃井 | それによってつくられているように感じられます。
- 二 宮 | そうです。それから弱い立場の人のために、社会主義的な考えを持っておられたのではな
- いかと思います。
- 玉乃井 | それから行くと、西山卯三先生との交流なんかもあったんじゃないですか。
- 二 宮 | それがね。あなたも質問事項に書いておられるけど、西山先生とのつながりはあまりないと思うんですよ。
- 住宅論とかでは、もちろん交流はあったかも知れませんが、特別に本に記載されるような、そんな間柄ではなかったんじゃないかと思います。私の認識不足かもしれませんが。
- 玉乃井 | 昔、松村先生が確か松山市民会館で、狂言をされた時に私は拝見しましたが、あの時だったか別の講演された時だったかに、西山先生が来られていました。
- 二 宮 | あっ、そうでした？全然知らない仲ではない筈ですよ。
- 玉乃井 | やはり松村先生の書かれた本を読んでいますと、あの時代というのは社会主義思想になるような気がします。
- 二 宮 | 時代背景がね。私なんか満州事変で生まれて、次々と戦争一色でしたから。生まれてから終戦の昭和20年になるまでね。軍国主義を植え付けられて。
- 戦後厳しい生活が続き、食べるものはないし。
- 一時期、配給のパンの中にワラが入っているの。だからこれはパンじゃなくて、馬糞だって私言っていましたよ。
- 玉乃井 | そういう時代には社会主義思想のようなものになるにしても、松村先生の場合はそれよりもっと「ヒューマニズム」の方が強いってどうか、そこから建築が生まれているような。
- 二 宮 | そうです。そうです。根底にあるのがね。所長は人間的に差別をしたりするということがなく、かわいそうな人達に手を差し伸べたいってというような。まあそれが小学校の子供たちの目線で設計をする、ということろへつながっているのじゃないかな、と思っています。
- 玉乃井 | そうですね。私見ですが日土小学校などは、“子供たちの生活の場”として設計されているように思えます。

二 宮 | 子供たちの目線でね。

それであのような設計が出来たってということは、やはり八幡浜の当時の菊池市長さんも偉かったのだらうと思います。普通の人達が反対をしても、市長さんが認めておられたから実現できたのだと思います。

玉乃井 | やはり公共建築というのは、自治体の長の、文化に対する見識みたいなものが大きく左右すると思われませんか。

それで思い浮かべるのは、香川県などは素晴らしい現代建築が出来て、今に残されている訳ですが、松村先生ご自身は丹下健三氏に対してはどのような感じを持っておられたと思いますか。

二 宮 | それはもう、丹下先生の優れたところは認めておられたと思います。

玉乃井 | 丁度同い年ですね。

二 宮 | そうですね。どちらも愛媛県出身ということで。

八幡浜時代のエピソードと日土のこと

二 宮 | それから話がまた飛びますが、今ではもうなくなりましたが、八幡浜劇場という立派な劇場があったんですよ。それを所長が改造をして映画館になりました。今はもうありませんが...

玉乃井 | その改造は八幡浜市役所時代のことですか。

二 宮 | そうです。だからアルバイトでしょうか。それで、地元のある設計事務所の人が助役室へ怒鳴り込んで来たとかね。「公務員がアルバイトをしてもいいのか」と、そんなこともあったらしいですよ。

そういった映画館のような、個人的に頼まれれば設計をしてあげていたんですよ。たぶん。そういうこともあったということも聞いていましたけど。

玉乃井 | 松村先生が設計をやって来られて、何かトラブルのようなことはありましたか。

二 宮 | それは事務所としてはないですよ。そうそう、日土小学校の河川法違反のことはありました

ね。

あれは初めて私が宇和町で、「木造建築研究フォーラム」の主催で所長の講演を聞いた時でしたか、もう皆笑いましたもの。

八 東 | あれは、ものすごく面白かったですね。

二 宮 | 私あの時初めて所長の講演を聞いて、本当にユーモアのある、そして説得力のある話され方に感動しました。

八 東 | あんな風にね。あの出来事をね。あの松村先生の独特な語り口で話されるのは、もう最高にいいですね。

二 宮 | 私の甥（建築士）なんかもね、所長は近寄り難い人という感じでいたのに、「あんな面白い人とは思わなかった」って言ってました。

八 東 | そうなんですよ。あれで松村ファンになりましたよ。

二 宮 | そういう人、多いですよものね。もう顔を見れば取っ付きにくい人だと思われていましたから。

八 東 | 取っ付きにくいイメージ、ありますものね。

二 宮 | だから狂言なんかもね。今のジュンク堂の斜め前の「鷺屋」さんがあるでしょ。京染屋さんですよ。たまたまその「鷺屋」さんのビルを設計して、施主の古川さんが狂言を教えておられた関係で、始められたんですよ。

八 東 | なるほど。そうだったんですか。

玉乃井 | 先ほどの講演のお話のユーモアというものも、狂言につながりますね。

二 宮 | そうですね。そう思うと、人との出会いというのは大事だな、と思いました。

病気のこと

玉乃井 | 松村先生がお亡くなりになった時のことについて、少しお伺いしたいのですが。

二 宮 | 所長はタバコを吸われなかったんです。お酒はよく飲まれました。今に肝臓で死ぬんじゃないか、と言いましたら「いや、ワシの母は胃で亡くなったから、ワシは肝臓じゃなくて胃で死ぬんじゃない」と言われてましたが、亡くなられたのは肝臓でした。

八 束 | そうだったんですか。それはお酒の飲み過ぎですか。

二 宮 | そうかも知れませんね。

私も実は、所長が愛大へ入院されていたことも知りませんでした。その時はもう事務所をやめて三越にいましたから。

人となりについて

玉乃井 | 最後になります。これまでのお話と重なるところもあるかも知れませんが、松村先生の人となりについてお伺いできればと思います。

二 宮 | 所長は自分に厳しく、人にはやさしい思いやりのある人でした。

それからよく原稿を書かれる人でした。文章は独特な飄々とした表現で、社会現象への皮肉を込めた批判などもされていました。

また私なんか分からないことを聞くと、「自分で学びなさい」と、手足をとって教えて下さるようなことはありませんでした。甘えはダメと。

本当に努力家で、幅広いジャンルの読書家で、生涯学ぶ姿勢を持ち続けた人だったと思います。

玉乃井 | 本日は長時間にわたって貴重かつ面白いお話をして頂き、ありがとうございました。



インタビュー後記

もう5年くらい経つのでしょうか。私が成り行きから「いしづち」の編集委員になってから。その間、二か月に一度は二宮さんに委員会でお会いしていましたが、これ程長時間にわたってお話をさせて頂いたのは初めてのことでした。

この、人。「建築家・松村正恒を見て来た人」は、長年松村正恒建築設計事務所で、文字通り身近に松村先生を見て来られた二宮初子氏の目から、松村正恒という建築家の一つの姿を浮かび上がらせてみようという、大それた企画だったのですが、その“成果”については、何分にも素人の私の“編集”能力の問題があって、それがどこまで出来たのかについては、誠に心許無いものがあります。

ですからそのあたりのところの“不首尾”については、“ド素人ゆえに”という逃げの一手の“煙幕”を張って、一方的に幕を下ろさせて頂きたい、と思っています。

実は、八束志郎氏と私を含めた三人の“対談”は四時間近くに及び、ご高齢ゆえに二宮さんの体調が少し気にはなったのですが、その心配は無用のお元気な語り口で、あっという間に時間が過ぎて、聞き手の私達二人は、随分と楽しませて頂きました。

そしてその時間の中では、二宮さんご自身のことなどもたくさんお聞かせ頂いたのですが、お聞きしているうちに私は、「すべての人生は物語なのだ」という、当たり前のことにも気付かされたのでした。そしてそれも又、この“対談”の一つの大きな収穫であったと思います。ともあれ二宮さん、八束さんありがとうございました。

夢

はじめに

新しく始まるこのコーナーは、建築士というものが何を考え、どんなことをしているのか、といったことを建築士会の内部から、一般の人達に向けて分かり易く発信して行こうというものです。「夢」は、主に設計者などの立場から、「現」は、それぞれの現場サイドからの発信になります。

会員の方々の中で、日頃建築について思っていること、考えていることがあれば、ぜひこのコーナーにご参加頂き、一般の人達に向けて発信して頂ければと思います。又このコーナーへのご意見、ご感想もお寄せください。(詳しくは広報委員会までお問い合わせ下さい。)

夢

ウン考

私達が子供の頃には、便所と言えば学校でも家庭でも汲み取り式の便所でした。と言うより私に限って言えば、子供の頃に水洗便所を見た記憶はありません。

今では殆んど見かけることはなくなりましたが、それでも建てて四十年以上も経った一部の借家や建築基準法の中には、汲み取り式便所はまだ生きています。

汲み取り式の便所の最大の欠点は、臭いと衛生面です。それゆえ便所は、母屋から離れた場所にあるのが普通で、子供の頃の夜の用足しの恐さは、少し年を取った世代の人ならば、誰もが経験したことと思います。ただこの欠点を除けば、口から入った食べ物が尻から出て、それが畑に肥料として撒かれて作物が実り、それが口に入ってまた尻からと、当時の便所は自然のサイクルの中で、ちゃんと自己完結していたのでした。それを色彩でイメージすれば、黄色と黄金色のサイクルになるかと思います。

「店中の 尻で大家は 餅をつき」という江戸時代の川柳は、まさにこのサイクルそのもので、長屋の総後架(共同便所)へ店子が落としたものは、大家さんの持ち物になり、大家さんはそれを近郊のお百姓さんに肥料として売ったり野菜などと交換したりして、その上がりで大家さんは、年末には餅をついて店子に配ったのだそうです。

つまり汲み取り式便所は、狭いながらも食物と排泄との中継地点、言わば「縁空間」(つなぎの空間)としてあったということです。さらには昼なお暗き便槽には、なにやらモノのうごめきを感じられ、その闇ゆえに、そこから下には“異界”が容易に想像され、汲み取り式便所は、この世と“異界”との境界領域としても意識され、その意味においても「縁空間」だったのかも知れません。

また汲み取り式便所には、お産の神様でもある廁神(かわやがみ)という神様もいたらしいのですが、そのことも黄金のサイクルのことも、闇が消え清潔になってすべてを流し去る、まさに“ウン散霧消”の今の水洗便所では、それらを想像することさえもできません。

ただ、便所でもの想うことが今も昔も変わらないと仮定すれば、その想いの受け皿となる今の便所の有り様は、昔の便所とは正反対の、暗さからイメージとしてまぶしいくらいまでの明るさへ、そして意識を下から上へと向わせて、新たな“異界”への「縁空間」として考えてみるのも面白いかも知れません。「心が解放されるような便所」などというのもいかがかと。

そうすれば、闇の喪失とともにどこかへ追いやられたあの廁神も、姿を変えて天から羽衣でもなびかせて便所へ舞い降りてくるのではないかと、考える人状態の私は“ウン考”するのですが...



現

大工の技の見せ場、今昔

松山支部 永井 明高

5月の連休過ぎの日曜日、私が大好きな建築物である道後温泉本館を見に行ってきました。道後温泉本館は、全体の建物がすばらしいのはもちろんのことではありますが、今回は、城大工の坂本又八郎氏の仕事で、どこがすごいのか自分なりに外部から5箇所見つけてきました。

1つ目は又新殿北側の塀上部欄間のアール部分です。漆喰取り合い部分は6ミリ程度の柱目を4枚程度重ね合わせコの字型とし上下中央で接合しています。この接合も合いじゃくりにて施工し、透かし彫りのデザインもすばらしいものがあります。

2つ目も又新殿の、正面の龍の鬼瓦下の破風板部分で、普通は正面中央で接ぐのですが、ここでは中心ではなく1本の大木を加工し両側で接合しております。これは大工のこだわりが見てとれます。こういう仕事をするには、素性のよい無節の大木でなければできませんし、難儀な仕事になります。

3つ目も又新殿の正面入口（御成門）の門扉で上部透かし欄間ですが、1枚の大木により加工し、その形はアールの変化部分に木目のすばらしい部分を見せて、まるで花が咲いたように見えました。すばらしい仕事だと感動しました。ただ割れているのが残念で勿体なく、また周囲の鏡板も割れていました。

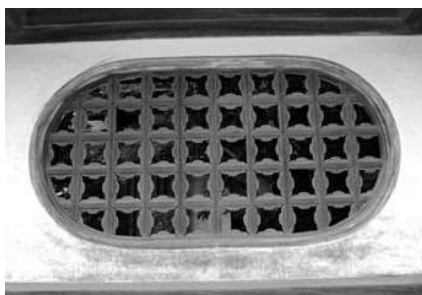
4つ目も又新殿の、屋根の下軒裏すだれ飾りのデザイン、ディテール、透かし彫り、吹き寄せ、出隅木の下がり寸法・手摺天端出隅部分の細さ直線からの反り起り曲線等で、それは繊細で軽やかに見えます。

5つ目も又新殿内部の桧皮葺きの屋根で、その反り起りの曲線美はすばらしいものがあります。大変感動しました。

ところが今日、木工事はプレカット工場での加工と木製建具、床材、額縁、階段、巾木等既製品建材に取って代り、それに加えて大工仕事が大壁の中に隠れてしまっています。さびしいのは、昔は時間を掛けていい仕事をする職人気質の大工が受け入れられていたのですが、今は早く、多くをこなす大工が受け入れられます。これはコストの問題なのではないところがあるのですが、大工の魅力が薄れて仕事の技が見えてこなくなっています。

そのため大工の心粋が伝わり、木の良さが数十年後にわかり伝わる仕事を残すためには、木の素材が必要です。できれば、作り手の仕事を使い手にわかる仕事が増えてほしいと思います。

現在、自然素材の家が復旧しつつありますが、和室が少なくなっている今、せめて一部屋くらいは大工の仕事が見える、無垢の床材、軒天化粧材、化粧垂木、化粧桁、木製格子、造作家具等を使用した家にしたいものです。使い手に将来においても感動してもらうために。



①欄間アール部分



②破風板納まり



③アールの変化部分



④飾り部分



⑤桧皮葺の屋根反り起りの曲線美

“切れ”のある郷愁風景

…いしづち表紙・山田 きよ氏の版画について…

玉乃井 公和

「山田 きよ」、と名前の字面だけからすれば、女性のようなイメージがありますが、喜多郡は五十崎の在の、れっきとしたイケメンの男性版画家です。

年に何回か開かれる個展は、もうゆうに100回は超えている筈で、そのバイタリティーと引力に引かれ、私達夫婦も年に一度はその作品を拝見することになっています。

山田さんの版画の手法は、独自の切りぬき手法によるシルクスクリーン版画、という技法だそうで、その題材には、時間の“さび”を品良く身にまとして生き続ける建築や町並み、或いは物質的には今ほどは豊かではなかったけれど、自然や人情は、今よりもはるかに豊かであった時代の郷愁風景などがあります。

それらはみな、ひととき私達の心を落ち着かせてくれる“切れ”のある風景です。

版画や絵画などの平面的表現の中には、当然のことながら人物・風景等の「空間」と、そこに気配やエネルギー等も含めた“動き”・「時間」が表現されています。

また、そこに込められた作者の「思い」とともに、時に「音」までもが聞こえてくるように感じられる作品もあります。

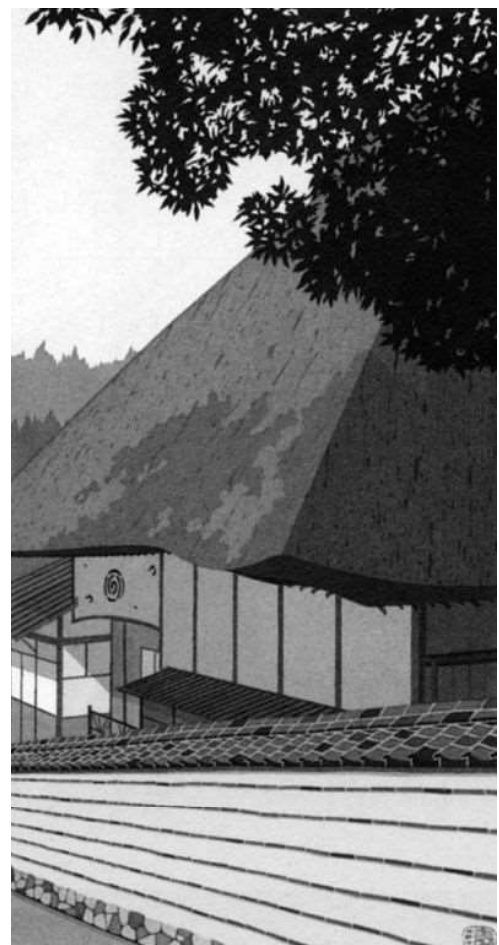
たとえば、葛飾北斎の作品から職人の掛け声や水音が聞こえてくるような、あの感じです。

そのように見てみれば、版画という平面的表現の中にも深みが出てくるように感じられます。さらには、「空間」「時間」「思い」「音」といった要素が、その作品の中にいかに深く表現されているのか、という観点から見つめてみれば、唐突ながら版画も、住まいをはじめとする建築の表現も、その根本においては何ら変わることがない、ということが見えてきます。

「郷愁」「安らぎ」「心地好き」といった感覚は、人間の心が感じ取るものであり、それらは、いつの時代に

あっても変わることなく私達に褪せることのない「歓び」を与え続けてくれます。言い換えれば、すべての“何事かをかたちづくる”ということの目的は、そうした「歓びをかたちにする」ということにあるのではないかと思ったりします。

作品を見るたびによみがえる風や音。さて、山田さんの“切れ”のある郷愁風景、どこかでひぐらしの声でも聞こえてきそうな作品があったような…



愛媛の職人「大工」

宇和島支部 兵頭 泰邦

私は十五の春から見習い修行をした大工です。

家を建てるには色々な建築工法がありますが、私は大工あがりなので木造在来工法が好きで日本瓦葺の入母屋やせがいの家を得意としております。

せがいとは軒を大きく張り出させるために大桁の外側にもう一つ桁を廻し棚のようにした軒下のことを言います。

このせがいのいわれは和船の両側の舷に渡した板で櫓をこいだり棹をさしたりする所からきたものと言われております。

私は70歳の今でも大工気質が抜けず建築中の家に大工の匠を取り入れております。

これまでに、茶室・お寺・神社・入母屋住宅・現代風の住宅も建てており、まだまだ大工でいたいと思い高校新卒を雇い伝授しております。

大工の修業は見て習うところから初めるものです。まずはカンナ、ノミ、ノコ等の研ぎ方や使い方、釘の打ち方などの基本から初めるのですが本物の大工になるには10年、いや一生かかってもなかなかないのです。

大工一筋に生きてきた私には家を建てるのが生きがいになっているのです。

しかし今では殆どがプレカットで、大工は切り組みをしないのです。棟上げからは大工の匠が光るような仕事をしなければなりません。大工はどんな仕事でもすぐに対応できるようにならなければ大工とは言えません。

仕口、継手や型はさまざまにある中でもう一つ紹介しましょう。いなご押さえといって、日本間の竿縁天井に無垢板（柱目の柳瀬杉等）を張るときに竿縁の間の無垢板が垂れて隙間（はだれ）ができないように天井裏側に竹でアリに作った物をくい込ませて板を押さえる工法で、稲につくいなごに似ているのでこの名前がついたのです。今の若い大工さんは見たことも聞いたこともないでしょう。ある家ではこれを950個もつくりました。それだけで大変です。

私は生涯大工です。腕の良い大工になるのは大変ですね。



建築市民講座

文化財・まちづくり委員 白石 耕平

去る3月15日、第13回建築市民講座を開催しました。今回の市民講座は今治市における長州大工の作品巡り。約30名の参加者が四国霊場第五番札所・南光坊大師堂に集まりました。寺尾保仁副会長の挨拶の後、南光坊の板脇俊匡住職による寺院の歴史、大師堂を後世に残す意義などが語られ、その後、大師堂で即興の長州大工勉強会を催しました。

長州大工とは江戸時代後期から大正時代にかけて山口県の周防大島から四国の村々に出稼ぎし、主に神社仏閣を手がけた大工集団の呼称です。長州大工の建築の特長は建物を飾る彫刻にあります。龍や獅子、様々な動物や植物など、過剰なほど彫刻に力を注いでいるのが特徴で愛媛県内には現存しない建物を含め84件の作品が確認されており、今治市には大正時代に手掛けられた3件があります。いずれも長州大工の中でも一番多くの作品を残した門井友祐が彫刻師として手掛けています。建築年代が前後しますが、3月15日に見学した順に紹介したいと思います。

最初に見学したのが南光坊大師堂（大正5年）。大師堂は建物の規模も大きく、彫刻は門井友祐の思いのままにさせたと考えられます。南光坊では水引虹梁の表面に凶柄が浮き出たように見える「陽刻」や、向こうの風景が透けて見える「籠彫り」など緻密な彫刻が見る事ができます。そして門井友祐が好んで用いた画題である尾垂木に彫られた「蜃」。一見、龍が炎を吐いているように見えますが、伝説上の「蜃」という生き物で、無から有を生み出すといわれ、口から吐いているのは「気」です。「蜃」が「気」を吐いて「楼」閣を出現させるといわれている。いわゆる蜃気楼です。参加者の方々に大師堂を見学していただいた後、次の見学地の真名井神社を訪れました。

真名井神社・拝殿（大正10年）私が氏子の方から聞いた逸話が残っていますので紹介します。「彫刻師として招かれた門井友祐は境内の片隅に座り込み、一向に仕事に取り掛かろうとしなかった。村人達が断ろうと話していた矢先、仕事を始め、一気に彫りあげた」

という話が今に伝わっています。この真名井神社を最後に長州大工の足跡は途絶えており、現在のところ長州大工における最後の作品となっています。

そして最後に向かったのが高橋にある大須伎神社・拝殿（大正2年）彫刻は向拝廻りだけに限られているが、今治市に残された他の作品と彫刻の画題、手法の違いを簡単に説明したいと思います。拝殿正面に立った時、まず目にするのが、唐破風に彫られた龍。二体の龍が中央の水晶玉のような物を目掛けて立ち上る様子が彫られています。破風板そのものを彫刻した例は珍しい。次に注目するのは臺股に彫刻された中国の仙人の逸話「瓢箪から駒」。仙人が駒（馬）に乗って数万里を旅する物語で休む時は瓢箪に馬を納め、乗る時は瓢箪から馬が現れ、旅をするという仙人の物語。そして蛙に話しかける仙人「蝦蟇仙人」が彫刻されている。今治市でこのような物語性の強い画題が使われたのは他にはない。大正時代に入り、活躍の場が今治に移り、門井友祐の彫刻師として生きていく意気込みを強く感じる作品に思えてなりません。

長州大工が愛媛に残した最初の仕事は旧川内町・滑川の地藏堂の中にある厨子（寛政3年・1791）初ですが、こういう小さな村の小さな工芸品から根を広げ、多くの神社・仏閣を建立して足跡を残していきました。海を隔てて見える四国に仕事を求めて出向いて行くという行動力が仕事の場を切り開いていったと考えられ、人間としての生き方に興味深いものがあります。

平成22年以降、長州大工の手掛けた社寺・民家の発見はされていませんが、今回の市民講座や建築士会の活動を通し、新しい発見に繋がればと期待しております。



真名井神社の見学



南光坊大師堂内での勉強会



南光坊大師堂の見学の様子



大須伎神社「瓢箪から駒」と「蝦蟇仙人」の彫刻

ひとりごと (雑論)

周桑支部 木村 久司

“けんちくの輪”とは、なんぞや?……(建築士会活動から遠退いている私にとっては理解しがたい……!!) 私なりの理解は「建築士会会員数増を狙った一つの手法!!」と自分勝手な解釈の基、パソコンに向かっております。

近年、一級建築士試験問題の難易度がより一層アップしているとか……?ということは、近々(近い将来)、一級建築士の社会的地位向上が現実のものとなるのかも……!!

古い先短い私の原稿で誌面を潰すのは如何なものか……!! と思い、私の知人(私よりずっとお若い Local Architect 非建築士会員)三名のひとりごとを掲載させて頂きます。(委員長に拒否されるかもしれませんが……。)

Aさんのひとりごと!!

仕事を断らない建築士たち!!

私は10年半、住宅メーカーに在籍しましたが、良心の呵責の連続です。お客様が組めるローンの限度額までデザインし、オプションを盛り込む設計担当ばかりが重用されます。私が安心して設計できたのは、十分な現金の用意があって、建てようとするお客さまだけです。過去の自分の設計した家を定期的に廻っていますが、表札が変わっている家も数知れません。

お客様の夢をかなえてあげることだけが、建築士の仕事ではないと思います。具体的にその資金でどれだけお客さまのオンリーワンのデザインをかなえてあげても、ローンが行き詰まり、手放すことになれば、不動産市場では二束三文。まともな、節度ある、節制の効いた常識的なプランでないと、誰も買ってくれません。

忠言は耳に痛いと言いますが、家を建てることを前提にやってきたお客様です。建築士が常識をもって、専門家として忠告などすれば、反感を買い、反発を招きます。皆、自分の意見に賛同してくれる人を喜ぶものです。お客様の資金と責任で進める工事だから、その儲け話に乗って、夢をかなえてあげるのが、目先の利益が得られていいでしょう。今までは、それで通用していました。建築業界全体が一様に目先の損得で動いて、結果、残ったものは、なんだったのでしょうか。全国、空き家、空き店舗、空きマンション、空きビルの羅列ではないですか。結果、いつまでたっても建築士は信用されません。

結局、お客様のことを親身になって考え、目先の利益に左右されることなく、良識ある建築士としてのアドバイスを続けていくことが、まわり道に見えるかもしれませんが、建築士の社会的地位の向上に

つながると私は信じて日々、行動していますが、皆さんはどうでしょうか。

Bさんのひとりごと!!

“建築士会”って、どんな集まり??

「建設業協会」「建築士事務所協会」「宅地建物取引業協会」……等々は各種業会団体だと理解しているが、「建築士会」は「弁護士会」「医師会」「歯科医師会」「税理士会」「土地家屋調査士会」「行政書士会」「司法書士会」……等々と同じような集まりですか??

「弁護士会」「医師会」「歯科医師会」「税理士会」「土地家屋調査士会」……等々は各種業界団体の様に見えるのですが、「建築士会」は業界団体??少し違うように思えるのですが??

どなたか、明確に教えて……!!

(明確に理解できれば入会ありかも……!!)

Cさんのひとりごと!!

なんで建築士には、一級建築士・二級建築士・木造建築士という区別があるの???

司法書士・土地家屋調査士・測量士・弁護士・医師……等々には区別はないのですが、建築士には種々の建築士があります。

姉歯事件後、構造一級建築士及び設備一級建築士まで増えました。どの建築士が建築士???

近々、建築士法の改正が現実化しようとしておりますが、私なりの建築士の定義を!!

一級建築士 = 建築士

二級建築士及び木造建築士 = 建築士補

構造一級建築士 = 構造士

設備一級建築士 = 設備士

この案、いかがでしょうか???

皆さんはどう思われますか???

(このテーマで“けんちくの輪”を広げては……。)

我々の時代では、建築士の社会的地位向上の成果は今一つだったような気がするが、必ずや近い将来(イツゾヤのノダ氏とタニガキ氏の約束事ではないですが……)での建築士の社会的地位向上を願いつつ、次世代の建築士にバトンを渡そうとしている今日この頃の私です。

石鎚山の山頂から“けんちくの輪”のバトンを投げたい(国宝投入堂ではないですが……)と思いますので、どなたか拾ってくださいね!!(原稿お願いいたします!!)

合掌



建築士会とわたし

けんちくの輪

八幡浜支部 氏間 貴則

けんちくの輪を八幡浜市役所の高橋さんからバトンをうけました八幡浜支部の氏間と申します。私は京都で専門学校を卒業後就職し父の建設会社を継ぐため八幡浜に帰郷しました。その当時開催されていた2級建築士の建築士会主催の講習会を受講するのに、建築士会に入会しないと受講できないと聞き、会員になり早くも20年近く経ちます。その講習のおかげで、2級は合格して正会員になることができました。その後泥沼??の一級建築士試験に突入…どうにか合格はできました(笑)

入会直後の20代の時は、地元の先輩に誘われて、全国大会、中四国ブロック大会など数多く参加させていただきました。30歳の時に八幡浜支部の青年委員長をさせていただき、31歳の時に当時の安藤雅人青年委員長から推薦いただき、愛媛県の青年委員長をさせていただくことになりました。その時はじめたのが女性委員会さんとの共同で中四国ブロック大会での発表課題だった「とびだせ建築士」という事業です。一番最初は松山工業の生徒さんにアンケートをとり見学会を萬翠荘でしました。説明を改修に携わった花岡さんからレクチャーしていただきメンバーで説明部分を分けてしました。自分自身も萬翠荘の知識がなかったのでこの事業をすることでかなり自分も詳しく知ることができ、テレビ愛媛のニュースでも紹介いただきました。発表資料なども青年、女性委員会で作成、発表練習なども

何度もしました。結果は、審査員と会場投票では1位でしたが僅差で惜しくも3位でしたがとてもいい思い出です。そこから現在では、「とびだせ建築士」愛媛県全域で行われ活動が活発になっていてうれしく思います。私が委員長の際は、なかなか青年委員会にも委員長さんがでていただけなかったりしたので、理事会後は必ず懇親会を開催したり、青年部の年齢を45歳までに引きあげたりいろいろ試みました。その時いっしょに活動した歴代青年委員長、山田さん、曾我さん、森川さんのおかげでいまでは自分の時よりかなり活発な青年委員会になっています。去年中四国若手建築志の集いでは、若いメンバーがたくさんいて青年部が盛り上がり上がってきていると感じました。私は建築士会の青年委員長が終わったあとは、地元の八幡浜商工会議所青年部の活動で、「八幡浜ちゃんぽんプロジェクト」などの事業をはじめ、現在では愛媛県では認知度が高まってきました。ぜひ皆さんも八幡浜にお越しの際は八幡浜ちゃんぽん食べてみてくださいね!!仕事の面でも現在では、松山方面での工事も増え建築士会で知り合ったメンバーなどの助けをいただき順調です。建築士会での繋がりこれからも大事にしていきたいです!青年部最近あまり出席できていませんが、まだあと4年ほどは青年部なので楽しみますので青年部の皆さまよろしくお願いたします。



とびだせ建築士のメンバー



安藤さんの発表で全国大会宇都宮に出展



技術講演会の打ち上げ



女性会の太田さんと中四国で発表



松工生と萬翠荘を見学



中四国ブロック大会発表打ち上げ

新広報委員紹介



氏名 小笠原 元
支部 周桑支部
勤務先 (株) オガサワラ
ひとこと

再び編集委員会に出させて頂くことになりました。繋ぐプレーをモットーに「いしづち」の編集に関わりたいと思っています。どうぞ宜しくお願いします。



氏名 石丸真智子
支部 今治支部
勤務先 石丸真智子建築設計室
ひとこと

最近、活字を追うのが億劫になってきた私が広報を担当することになりました。これもなにかのお導きと思い、「いしづち」の編集に関わらせていただきます。皆様よろしく申し上げます。

愛媛県建築士会会費を口座振替されている会員様へ重要なお知らせ

今年度より会費を口座振替にされている会員様へは請求書を送付いたしませんので、ご了承願います。

来年度からは会報「いしづち」にて口座振替日をお知らせいたしますので、よろしく申し上げます。

なお、請求書が必要な方は事務局までご連絡下さい。

平成 26 年度会費の口座振替のお知らせ

平成 26 年度会費につきまして下記のとおりとさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

なお、ご請求額は下記の引落日にご指定の口座より自動引落させていただきます。

今後とも、引き続きご協力をお願い申し上げます。

※ご指定の口座が変更している場合は至急お知らせ下さい。

①正会員の方…12,000 円

②正会員 + 建築 CPD 情報提供制度に参加の方…12,510 円

③準会員の方…11,000 円

口座振替日：平成 26 年 7 月 28 日(月)

※会費の納入方法を口座振替に変更されたい方は事務局までご連絡ください。

あなたの原稿をお待ちしています。

公益社団法人として、広く異業種や全ての皆様から建築士会の枠を超えて原稿を広く募集して広く購買して頂くようにしていきます。是非、寄稿して頂きますようお願い致します。本年度は年6回発行となります。

「いしづち」の本年度の原稿締切日

平成26年	9月号(100号)	7月24日(休)	平成27年	1月号(102号)	11月20日(休)
	11月号(101号)	9月25日(休)		3月号(103号)	1月22日(休)
				5月号(104号)	3月26日(休)

※校正印刷の関係で締切延長の最終期限は一週間後の木曜日とします。

※1ページ写真込みで2150文字(25文字×43行×横2段)のWORD様式を事務局で用意していますのでご活用ください。

写真は1ページ当たり5枚程度まで題名を付けて添付ください。

また宜しければ投稿者の写真(免許写真程度の顔写真)を添付ください。

「間」「夢・現」などへの、会員の皆様のご参加をお待ちしております。また記事等についてのご意見・ご感想もお寄せください。

この誌面を通じて、会員の方々、そして一般の方々にも、建築についての対話等の輪が広がれば、と願っています。

情報・広報委員会

読者の声欄**編集後記**

今回から建築士会の会員のみならず、一般の人達にも読んで頂けるような誌面を、ということで、新しく「間」と「夢・現」という連載を始めました。

それから「人・建築家・松村正恒を見て来た人」は、長年にわたって文字通り、すぐそばで松村正恒氏を見て来られた二宮初子氏への、約1時間のインタビュー記事です。

この中での、松村正恒氏がそこらにあった紙に、ササッと書かれた“松村語録”も機会があれば掲載して行きたいと思っています。(玉乃井 公和)

〈いしづち〉2014 / 7

平成26年7月発行

発行人 **会長 寺尾 保仁**

発行所 **公益社団法人 愛媛県建築士会**

〒790-0002 松山市二番町四丁目1-5

TEL (089)945-6100 FAX (089)948-0061

http://www.ehime-shikai.com E-mail: info@ehime-shikai.com

印刷所 明星印刷工業株式会社

情報・広報委員会

委員長 玉乃井公和 副委員長 大上 恵子

編集委員 二宮 初子 宮内 理 越智 麻衣 石丸真智子 小笠原 元 水野日出夫